



## 学習指導力向上研修会

令和7年10月2日(木)

最上管内の各小・中学校、義務教育学校、各市町村教育委員会から約40名の方々に参加いただきました。研修会では、最上教育事務所より令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果分析と対応について説明させていただき、「授業改善へのアクション(R7)」を確認させていただきました。校内研修の視点と照らし合わせながら、まずは組織として1点取り組んでいただければと思います。その後、山形大学学術研究院野口徹教授より「全国学調の問題から授業づくりを考える」をテーマに講義と演習を行っていただきました。スライド資料についても一部抜粋しましたので、参考にしていただければと思います。

### 講演より

- 国語と総合的な学習の時間の学習内容とが児童生徒にとって必然性のあるリンクとして感じられ、学習している内容が「自分だったら〇〇と考える」という思考によって活性化する授業がもっと必要である。
- 算数・数学では、既習の学習や生活経験をもとに「見通し」を立て、「言語化(つぶやいたり、ノートに記述したり)」することを通して、問題解決を行う。
- 自らの学びを自覚(モニター)して自分で動かしていく⇒自律した学習



### ～参加された先生方の声～

- 本校でも「自分はどう考えるか」を問われることに課題があると感じました。自分の考えをしっかりと持って交流させることや、既習事項を活かして学びの見通しを持たせることを大切にしていきたいと思います。
- 問題を解き、感想を交流することで、他教科の先生方ともつけたい力が共有でき、授業の中で意識できるようになると感じました。「課題一見通し一演習一まとめ一振り返り」の流れを共有していきたいと思います。

令和7年10月2日 学習指導力向上研修会資料より抜粋

**総合的な学習の時間でも国語でも児童一人一人が「自分の興味ある仕事」という「学習課題」について自らの「学習課題」について、自らの「気付き」や「疑問」をもっていなければ、この授業は成立しません。つまり、児童全員が自分の「気付き」を言語化することが日常的な授業内容であることを求めています。**

習得した知識を活用し、その意味を確認する場面が少ないこと

数学の授業では  
生徒自らが、既習している「知識・技能」を  
それ以降の学習場面で「活用」する場面を設定し、  
基礎的な知識・技能の意味を確認することが必要

→「深い学び」となる授業

### R7 授業改善へのアクション(地区としての取り組み)

教科の本質を捉えた基礎的・基本的な知識・技能の「定着」を目指した授業づくりの日常実践  
①学習活動を通して、身に付けさせたい知識・技能を繰り返し活用し、定着を図る。  
②教科等の「見方・考え方」を働きかせ、個の学びを保障しながら協働的な学びにおける対話の質を高める学習活動を仕組む。  
③振り返りを通して学びを自覚し、授業とのつながりを意識した家庭学習につなげる。

教科におけるつけたい資質・能力を明確にした適切な評価の実施

①教科におけるつけたい資質・能力を明確にした単元を構成する。  
②具体的な評価規準を作成し、児童生徒と共有する。  
③評価問題・活動を必ず実施し、児童生徒の学習改善・教師の指導改善に生かす。

児童生徒の実態を把握し、校内研究のレベルアップにつなげる

①日々の授業及び学力調査から、誤答やつまづきを分析し、授業改善に生かす。  
②定期的にアクションプランの見直し・校内での共有を行い、C(チェック)A(アクション)の充実を図る。  
③発達段階に応じた、計画的かつ必然性のあるICT活用を推進する。

学校教育指導の重点  
授業づくりについて  
各授業で  
①子どもたち一人ひとりが  
主役となって思考する場面  
②その思考過程を表現する場面  
を設定した深い学びで  
資質・能力をしっかりと育成する

# 第3回初任者研修授業研究会 令和7年10月14日(火)

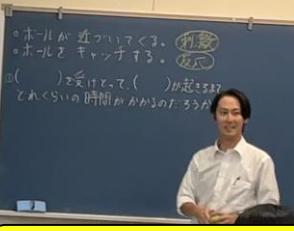
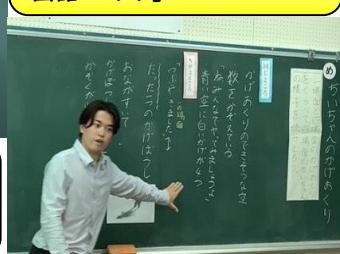
小・中学校等・高等学校の初任者29名が真室川小学校、鮭川小学校、最上中学校、鮭川中学校の4会場に分かれて授業研究会を行いました。事後研究会では、「学びを深める交流・教師のかかわり」の視点を意識し、それぞれの授業で子どもの学びを深めるための発問や問い合わせ、グループでの学び合いについて活発な協議が行われました。小・中・高のそれぞれの立場からの意見は、授業者、参加者双方にとって自分自身の授業を振り返るうえで大きな刺激となりました。授業研究会は次回の11月26日(水)が最後となります。

## 授業の様子



齋藤 真意 教諭(真室川小)  
3年「見つからないいりコー  
道徳 ダー」(A 節度・節制)

伊川 壮司 教諭(鮭川小)  
3年「ちいちゃんのかげお  
国語 クリ」



遠藤潤一郎 教諭(鮭川中)  
1年「比例と反比例」  
数学



奥山 悠斗 教諭(最上中)  
2年「生物のからだのつく  
理科 りとはたらき」

## ★振り返りアンケートより★

- ・課題とまとめの整合性や、発問・問い合わせなど自分自身の実践に参考になることが数多く見つかりました。
- ・授業を構想する際に、授業後の児童生徒のゴールの姿を思い描くことの大切さを改めて感じることができました。
- ・調べたことや考えたことを共有した後に、再構築する場を設定する重要性について確認することができました。
- ・教師が話過ぎることなく、子どもたちが十分に考える時間が確保できるように意識していきたいと思います。

## 協議の様子



# M-TEP 算数・数学授業づくり講座 令和7年9月4日・18日

「確かな学力育成支援 (M-TEP) C:チーム研修型」との共催で、オンラインによる授業づくり講座を実施し、最上管内の小・中学校、義務教育学校、市町村教育委員会等から22名の方々に参加いただきました。関西学院大学教授大澤弘典先生より「児童生徒がわかる!できる!好き!を実感する授業づくり」をテーマに、日々の教材研究や授業づくりのポイント、教師の役割等について講義を行っていただきました。明日からの実践に活用できる多くのヒントを得ることができた貴重な研修となりました。

## ★参加者アンケートより★

- ・「子どもの問い合わせから授業を始める」という視点が、ます必要なことだと実感しました。今日初めて聞いた『ハンズオンマス(手でわかる数学)』についても調べて、今より少しでも、子どもが必要感をもって取り組めるような授業をつくっていきたいと思います。
- ・みかんの表面積を求めるという課題では、各学年の算数・数学の知識を用いて様々な考え方があり、課題を吟味することで様々な生徒の反応が予想できることを知り、教材研究の深さと面白さを実感しました。
- ・数当てゲームや6桁の計算の活動で、子どもが疑問をもち、いろんなことを検証している姿を見て、こういった授業を目指したいと思いました。日常を数的な視点で見て、授業で取り入れられそう!という感覚を高めたいです。

ハンズオンマス(hands-on math):体験的数学(算数)学習

実際に手や身体を動かして数学的な概念や手法を体験的に学ぶアプローチ

→ 子どもの興味・関心を引き出す!  
cf. 内的活動 + 外的活動

ハンズオン(hands on):  
直訳は「手を置く(手を触れる)」  
実際に手などを動かして、  
体験したり実践したりすること

### 【活動の種類例】

- ・日常の事象と関連した活動
- ・ものづくりなどの作業的活動
- ・実際の数量にある体験的活動 など

(坪田耕三, 2011年)

